

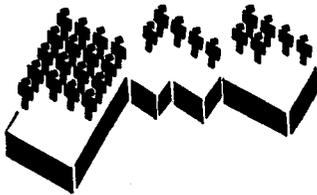
おり、いずれも集計タイプであったのに対して、最近是非集計タイプの交通現象分析、交通サービスの評価構造、環境影響の貨幣換算法、バス輸送システムなどの研究を行なうようになり、さらに土地利用—交通モデルや住宅立地、産業立地モデルや交通施設の社会・経済効果などに関する分野の研究も行なうようになった。

これらの研究成果は土木学会論文報告集(第4部門)、

同学会土木計画学研究論文集、交通工学、都市計画学会誌、等に公表している。

本研究室の学生は、現在大学院博士課程後期1名、前期5名、研究生3名、学部4年生4人であり、大学院生の中に韓国からの2人とフィリピンからの1人の留学生が含まれており、研究生の1人は名古屋市の職員である。

(河上省吾)



会員近況

のと思います。

(真鍋氏が最近著書を出されたとうかがい、その紹介もかねて近況をおうかがいしました。——会員の方で出版その他がございましたらご一報ください。〔編集部〕)

中京大学 学生部 佐野 文彦

神戸商科大学 管理科学科 真鍋 龍太郎

着想から4年以上も過ぎて、進歩の激しいこの世界ではタイミングがやや外れましたが、この6月に培風館のプレイマイコンシリーズ(刀根 薫先生監修)の1冊として「ビシカルク——表計算ソフトの活用」(B5判170ページ)を出版しました。パソコンの表計算ソフトのより一層の利用をお勧めしたくて書いたものです。何年か前に、この欄に、自分の秘書代りにマイコンを使っています、と書きましたが、私の研究室のOA術の公開でもあります。

パソコンを買ったけど、当初は別として使用頻度が落ちてきたという方はありませんか。それは、BASICに頼り過ぎていることが一因と思います。スプレッド・シートを使えばすぐにも活用できるのに、と思って自分が使った例題にいくつかの活用例を加えて書いたものです。ビシカルク以外の表計算ソフトの利用者にもご参考いただけます。

ORを普及させようとする者としては、近頃のパソコン・ブームは、うまく利用したいと思います。仕事をうまくやろう、問題を解決しようとしてパソコンを用いたり、OAだと言ったりするのですから、問題解決の考え方と手法としてのOR/MSが黙っている手はありません。

前記、表計算ソフトもそのための道具の1つとして使えます。それらを今度は4年もおかからずにとまめたいも

私の所属する大学の学生部は、大学における研究・教育活動を直接的に支えるための教学事務を、学生の厚生補導の面から遂行している部門である。

近年の社会におけるOA化、あるいは業務のシステム化といった傾向は、大学事務の分野においても例外ではなく、全国の多数の大学において業務のEDP化が図られている。本学においても、業務のEDP化を目的とした情報処理センターを設立しようとする動きはあるのだが、諸般の事情により、学生情報データベースを中心としたトータルシステムまでは達成されていないのが現状である。というよりむしろ、各部門ごとにOA化に着手してしまっているというのが的確な表現であろう。

ところで、私は今年の5月に開催されたOR学会の春季研究発表会の席上、刀根薫先生が講演された“AHP”に興味をもち、コンピュータの機種選定をはじめとした大学事務のシステム化に“AHP”といった考え方がうまく利用できないものかと思案している最中である。

会員の皆様方には、業務をシステム化する上においても財政的な問題、システム要員の問題等々、さまざまな困難な問題を解決するために有効と思われる方法、また事例がありましたらご教示願いたいと存じます。

(株)ニップラ 代表取締役社長 持本 志行

昭和22年、(株)日本製鋼所に就職し、工場および本社各

部門を勤め、現在は子会社におります。過去10年近くは、いわゆる経営管理の仕事にたずさわっており、その関係などもあって、経営管理に関する学術に興味をもち、それがどのような趨勢にあり、どのようなことが科学的に解明できるのかを知り、これを活用したいと努めてきました。このような目的で経営工学3学会（OR, JIMA, JSQC）に入会し、学界の空気に触れさせていただいているわけです。学会活動の面でスリーピング会員で申訳ありません。経営学の分野では組織学会会員です。最近、日科技連出版社より「TQCによる戦略経営の展開」（A5判262頁）を出版いたしました。

さて、経営学と経営工学はともに主として企業の経営管理に関する問題を研究対象としていますが、その学際的領域において相互に研究成果などの学習が等閑視されていることが諸発表や産業教育の場などで散見されることがよくあり、産業人として奇異に思うことがあります。この中にあって、OR学会には両学界にまたがる活躍をされている方々も多いわけで、ご同慶の至りと考えます。

住金システム開発(株) 阿澄 一寛

おそらく日本で最も古いと思われる目崎・横山・大澤先生の御訳書¹⁾、宮脇・三根・藤沢3先生の御共著²⁾をむさぼるように読んでORに興味をもち、どうせやるなら実践の場でと考えて住友金属に入社したのが昭和33年、折からコンピュータの実用化初期段階で、ORはもちろん、技術計算・推計学・プロセス解析、プロセス制御・情報処理と手当たり次第にやっているうちに、いつのまにか管理者・経営者の道を歩くようになってしまいました。ORの実技のほうは会員の徳山博子君が遺志を継いで頑張ってくれ、住友金属にOR学会賞をもたらしてくれましたが、管理・経営の実務としてORを見てゆく中で、当初は与えられた制約条件の範囲で最適値を求める最適化の手法と考えていたORが、より良い最適値を得るためにはどの制約を打破するのが最も効果的なのかを調べるブレイクスルーの手法に見えてきました。数式はすっかり忘れてしまいましたが、哲学としてのORは活かしているつもりです。

1) 経営のためのオペレーションズ・リサーチ

目崎憲司、横山保、大澤豊

同文館 昭和31年9月25日初版

Operations Research for Management

Edited by J. F. McCloskey and

F. N. Trafether

The John Hopkins Press 1954

2) オペレーションズ・リサーチ—運用・企画・経営の科学—

宮脇一男・三根久・藤沢俊男

昭和32年6月10日初版 共立出版

岐阜県伊奈波保健所
技術吏員(医)

佐野 史和

現在、国立公衆衛生院にて、長期研修中であります。対人保健サービスの今後のあり方について、定見のない状況にある中で、「最適化」と「規制緩和」という2つの言葉が頭の中をうづまいています。この場合の評価関数の軸として、「質の保証」が声高に叫ばなければなりません。医療に関してだとモノが難しくなるので、現在の私の足である原付スクータについて考えてみたいと思います。原付とはいっても、最高速は市街路では充分であり、リッター当り40km位走り、無給油で200km位走る現在の原付スクータを考えるに、これ以上の乗り物はありません。オートマチックのイーロードライブであるばかりか、税金は、年間およそ1000円。しかし、原付には女の子と一緒に乗ってくれません。ブランド物と無印良品。会員制の病院とプライマリ・ヘルスケア。㊟と㊠。何を「最適化」してゆくのかについて、腹を決めて望む所存でございます。

東亜燃料工業(株)
川崎工場システム課

滝沢 靖男

石油精製装置の計算機制御アプリケーション業務を担当して16年になります。この間の制御用計算機の進歩はいちじるしく、小は1ループ DDC (Direct Digital Control) から、大は工場全体あるいはコンビナート全体を1台の計算機で運転監視するものまで広く活用されています。

アプリケーション技術面では、長いあいだプロセス制御システムにおける“理論と実際のギャップ”が指摘されてきましたが、最近ではギャップを埋める動きが学界・産業界双方から盛んです。計算機の進歩により複雑・高度な制御理論を実際の場に適用する環境が整ったこと、制御理論やアルゴリズムをパッケージ化して高度な数学の使用やプログラミング努力からユーザーを解放しつつ

あることがその背景になっています。

プロセス制御のカバーする範囲は急速に拡大され、OR分野とのオーバーラップが進んでいます。制御とORの相互刺激、そして理論と実際の相互刺激を通して、制御とORとが一層の発展をとげることを望んでいます。

九州東海大学
工学部経営管理学科 定方 希夫

最近、情報化時代、システム化時代とよくいわれるがその本質あるいは影響するところは何か、を専門領域ごとによく考察する必要があるのではなからうか。

私は長期間ビークルトラフィックに関するシステムの研究や開発をしてきたが、その間、大型システムの目標・目的策定、評価基準設定、最適化など、システム構築のための具体的設計を行ない、要素機器の開発や制御アルゴリズムの設計も担当してきた。これらのシステムは現在も活動しているが、今強く感じることは、“システムは生き物である”という点である。社会的価値観に強く反応し、制御パラメータや評価基準の修正・追加を行なうことがありうるからである。つまり、大型システムはその構築に際しては、長い期間と膨大なエネルギーを投入するが、そこで終りではなく完成後もたえず高度な智力の投入が必要なのである。オペレーションズ・リサーチをはじめとして経営工学や管理工学はまさにこれらシステムの構築から運用まで重要な役割を担う学問分野である。そして、情報化時代を象徴するシステムもまた構築されたハードウェアをいかに運用するかに重要な一面があるからである。

本稿を記述している時、日航ジャンボ機が群馬県の山中に墜落するという痛ましい大事故が発生したが、交通システムは社会の多くの人びとと、多数の運用者と、大型のハードウェアを包含した人間一機械系のシステムであるが、その評価基準や運用基準は、要素となるハードウェアと別にたえず研究対象としてとりあげなければならないことを感じた。そしてまた、オートメーションの名のもとに、生産現場その他に構築されつつある多くのシステムについても同様なことがいえるのではないだろうか。

筑波大学社会工学系 室田 一雄

本誌に「会員近況」という欄があることは知っている

したが、これが「会員名簿から任意に選ぶ」指名制とは知りませんでした。任意抽出とはランダム抽出と同義かどうか不明ですが、一会員の義務を果たすべく、夜中に筆を執りました。

近況といっても、なぜか忙しい、というだけですが、この「忙しい」というのが曲者で、実は、自分で自分を忙しくしておいて、忙しくてとても研究ができない、と文句を言って言い訳しているわけです。「多忙とは現代の怠惰である」と誰かが言ったとか、言わないとか。

研究をしようと、いちどは心に決めた人たちが、何故忙しくなる(する)のか。世間にはいろいろな用事があるのかもしれない。そして、忙しいと思うとますます頑張るって研究が進む人もいるのかもしれない。でも、かなわんなあ、と私のような愛閑家は思う。学生時代のように今日は何して時間を潰そう、なんてことを悩んでみたいと思う。

OR学会の愛閑家同志に呼びかけたい。学会活動は、もっとささやかにやってもいいとは思いませんか。たとえば研究発表会とシンポジウムは年1回にするとか、会誌は隔月刊にするとか——こんなこと書くと「懺悔！」と叱られるかなあ。

NTT武蔵野電気通信研究所 齋藤 洋

NTT入社以来、2年余、トラヒック予測の研究に従事している。従来のトラヒック研究は待ち行列理論を中心としたものであり、OR学会での活動状況も周知のものであるが、私の場合は、統計的予測手法が興味の中心であり、待ち行列にはあまり縁がない。

トラヒック予測という専門のため、学会活動の場は、OR学会と電子通信学会が中心となる。OR学会で発表するものとしては、通信サービスの予測という特殊性の少ない、できるだけ汎用的な需要予測法を心がけている。予測研究者が会する機会は意外に少なく、OR学会は貴重な意見交換の場となっている。

法政大学工学部電気工学科 寺野 寿郎

7月1日から5日までスペインのマロルカ島で開かれた第1回の国際フェジィ・システム学会に参加した。ここはヨーロッパの保養地として知られた風光明媚な所である。上記の学会は本年発足したばかりで、その目的は

人間の思考や判断、認識などのあいまいさを積極的に利用して情報システム、マン・マシン・システム、あるいは社会システムの複雑な問題を解決しようとするものである。この会議には全ヨーロッパ、北米、日本、中国などから300余編の論文発表があった、日本からの参加者が海外在留者をふくめて25名であったのに中国がそれを超す30名の学者を派遣したのが注目された。応用研究と理論研究はほぼ半々であったが、応用は人工知能、エキ

スパート・システム、ロボット、診断、OR、モデリング、制御など非常に多岐にわたっている。参加者の専門も数学から経済、心理などさまざまであるところに特色がある。

第2回の会議は1987年に日本で開催することになり各国から大きな期待が寄せられている。本学会にも協賛をお願いすることになると思うので、ぜひ強力なご支援を賜りたい。

会合記録

	()内は人数
モニター委員会	8月5日(月) (3)
FMES	8月6日(火) (7)
編集委員会 (OR誌)	8月7日(水) (8)
普及委員会	8月9日(金) (6)

入退会

(60. 7. 26)

●移動 (学生会員→正会員)

井田 八郎 東京工業大学→(社)海外コンサルティング企業協会
糸永 慎一 京都大学→新日本製鐵㈱

大橋 明德 青山学院大学→Oceanroutes Inc. (USA)

上垣 隆 防衛大学校→防衛庁海上自衛隊
佐藤 泰司 広島大学→広島大学
渋谷 真 神戸大学→㈱神戸製鋼所
千葉 靖紀 北海道工業大学→土別市役所
山田 俊哉 神戸商科大学→三菱油化㈱

(賛助会員)

住友金属鉱山㈱
センチュリリサーチセンタ㈱
日本ユニパック㈱ 北海道システム部
糧友グループ事業協同組合

編集後記▶前任の方々から引継いで半年、新編集委員たちもやっと編集の仕事に慣れてきて、どうにか仕事も軌道にのったところで、事務局の寺地さんが9月いっぱいでご結婚のため退職されました。前任者の平井さんから引継いで2年4カ月にわたりOR誌の編集実務を一手に引受けていただきました。原稿の依頼状発送や受領、問合せ、学会事務局関係の原稿作成、とりまとめ、編集委員や印刷所との連絡、校正手伝いなどの仕事だけであ

く、編集委員会にも夜遅くまでお付き合いいただきました。OR誌が毎月とどこおりなく発刊できましたのも、こうした実務面をしっかりと実行して下さったお陰と感謝するとともに、今後のご多幸を心よりお祈り申し上げます。寺地さんに退職されて、いささか心もとない心境の編集委員一同ですが、なんとか読者・執筆者の皆様にご迷惑をお掛けしないようにガンバッテいきたいと思

オペレーションズ・リサーチ

昭和60年10月号 第30巻 (新シリーズ第10巻) 10号 通巻298号
代表者 近藤次郎
発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) 〒113
編集人 柳井浩
発売所 株式会社 日科技連出版社
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 〒151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 850円 (郵送料含) 年間予約購読料 9600円 (郵送料含)

本誌への広告お申し込みは明報社 (571-2548)、日経弘報社 (583-2241) へ